

氏名(本籍) 野口鐵郎(東京都)

学位の種類 文学博士

学位記番号 博乙第177号

学位授与年月日 昭和59年3月22日

学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

審査研究科 歴史・人類学研究科

学位論文題目 明代白蓮教史の研究

主査 筑波大学教授 文学博士 長瀬 守

副査 筑波大学教授 芳賀 登

副査 筑波大学教授 文学博士 宮田 登

副査 筑波大学助教授 三石 善吉

副査 筑波大学助教授 安藤 正士

論文の要旨

本論文は、中国の明・清時代に活躍し、系譜的には中国革命にまで繋がる諸種の民衆運動に関与した特色ある白蓮教という秘密宗教の、明代における諸姿相を明らかにすることを目標とした論考で、400字詰原稿用紙1,183枚にわたり、四編十五章よりなる。

白蓮教は釈迦仏掌教の現世を越えたあとに、弥勒仏の下生による理想世が出現するという現世否定の信仰を教理の根底にもつ。従って行動にも現在の政治・社会を否定する傾向をもった宗教であり、絶えず政治権力の摘発の対象となった。故に典拠とする関連史料も少なく且つ断片的である。野口氏は、このような史料の残存形態を踏まえて、本論文構成にあたり、通史的に個々の白蓮教結社の実態を解明する部分と、総括的にいくつかのテーマによりそれらを捉え直す部分にわけて考察している。また、明代白蓮教史を補完するために清末の秘密宗教史についても考察し、いわば全白蓮教史を俯瞰する立場をとっている。

第一編は「序論」である。第一章は、本論文がとり扱う白蓮教の概念を整理・規定し、第二章では、関連する先行の業績を分類・整理し、研究動向を辿って課題と展望を明らかにしている。

第二編「明代白蓮教結社の成立と展開」は、明代白蓮教を通史的に分析したものである。第一章は、後世に繋がる白蓮教の成立を元末明初にあるとし、その成立に関連する元代の白蓮宗・白蓮会・弥勒教・マニ教の歴史と動向を検討し、韓山童の結社において強い臨凡信仰とそれに由来する政治・

宗教的行動様式をもつ白蓮教が成立したことを、史料的・論理的に明確にした。第二章は、明初の洪武、永楽、洪熙・宣徳、正統の各朝代における白蓮教諸結社の活動を「明実録」を主材料として、それぞれの時期の地域的分布と系譜を説き、さらに各時代の時代的特色と白蓮教の地域的分布との関連、王朝権力のあり方と白蓮教活動との関連を検討している。つづいて、明代は永楽にはじまるという通説が秘密結社史の上でも確認されることを明らかにした。第三章は、北虜の禍として明朝を脅かしたタタール族の中国進攻に、北辺の白蓮教結社が大きな役割を果たしたことを究明した。それは白蓮教の側からみれば、教理上にあるユートピアの建設の意味をもつこと、農作をはじめとする中国文明のタタール族への付与は、タタール族の軟化と明朝への帰順をもたらしたこと、などを論じた。第四章は、明末の華北における徐鴻儒の乱を素材に、その結社を分析し、満州族の華北進攻というこの時期の特殊性が、白蓮教の活動を活発化する要因であったことを明らかにした。第五章は、明末清初の政治的・社会的混乱下の江西における密教結社をあとづけて、密教のような秘密宗教が生起した特殊性と、宗教性の飛躍的深化の様相を究明している。このことは野口氏の秘密宗教史の時代区分に大きく係わってくる。

第三編「総括的白蓮教史論」は、四つのテーマを設け、明代白蓮教の諸活動を、論理的・総合的に究明したものである。第一章は、白蓮教の基本的な教理と、結社が描く理想に到達するために行使した諸術を対象としている。白蓮教は、現体制否定による浄土出現という期待意識と起動原理をもち、また、政治的反体制運動を宗教的反体制運動の前提に設定するから、そこには此岸の欲望満足の寇掠主義と、彼岸的願望充足の禁欲主義とが交錯して露呈されると論じ、それに即応した術のもつ意味を明確にした。第二章は、教徒について論ずる。教徒の出身階層を分析し、一は結社の現世的利益を求める貧窮民衆で結社構成の大半を占め、他は宗室・官僚層で結社に関与する場合も少なくないことを論じ、それぞれが結社に参加した背景について検討している。第三章は、白蓮教などが行った蓄財活動について検討している。賽銭・献金などのほか、非日常的・非合法的な手段や合法的・恒常的な活動を通じ、教徒の生活安定をはかったことを論じた。第四章では、白蓮教の活動を、欧米で宗教運動の理解に採用される千年王国論的観点から究明することが不可能でないことを論証した。白蓮教活動の諸要素を、基底となるもの、主要なもの、派生的なものに分けて、それらがコーンやウィルソンのいう千年王国論的宗教運動の特徴に合致することを確認し、中国の白蓮教を世界史的視野で捉えることの必要性を説いている。

附編「清末江西の秘密宗教と近代化への傾斜」における四つの論考は、いずれも十九世紀の江西省における秘密宗教に係わるものである。第一章より第三章までは、同じ母胎を共有すると思われる三乗教・羅祖教・紅白黄教・紅蓮教などの宗教的系譜を探り、それらが従来の伝統をひく秘密結社の教理などによって民衆に働きかける一方で、反清的政治結社である天地会・哥老会などの会党としての活動をも行ったことに着目し、そこに秘密宗教から会党へという図式が描かれることを論証した。こうした傾向は、第一章で十九世紀前半には既に芽生えていたことを指摘し、太平天国を経て以後に一層助長されたこと第二章で述べ、第三章では、この動きが中国革命に向けての勢力に継承されていく方向をとる、と論じた。ただし、すべての秘密宗教がこの道を辿るのではなく、第四

章では、秘密宗教的傾向をもちつつ、体制に順応して施薬治病の慈善団体として今日も華人社会に生き続ける真空教のような宗教結社もあったことを説く。

結章第一は、以上のように通史的・総括的に究明してきた明代白蓮教史の諸相と十九世紀の秘密宗教の動向の究明を踏まえて、白蓮教をふくむ秘密宗教史の時代区分を試みたものである。元末における白蓮教の成立以後、それは二回の変革期をもったとし、第一は明末清初で宗教性の深化や新しい神格の創出などがなされ、第二は清末の秘密宗教から会党への軌跡を描いたときであるとし、それぞれの変革の必然性に論及している。結章第二は、主として今後の研究課題を示し、特に秘密宗教に参加した民衆像の究明が重要であると指摘している。

審 査 の 要 旨

本論文第一編第一章に提示されているように、この主題に係わる研究業績は決して少なくない。しかし、それらの多くは断片的で且つ目的意識が過剰である。従って本論文にみられるように、明代の白蓮教史を主題におきながらも、その全体像を見通した上での研究は極めて少なく、学界に寄与するところ多大であると思われる。

量的・質的に制限された史料の残存状況を克服するために野口氏がとった通史的解明と総括的把握の手法は、方法論的にも明代白蓮教史の究明に大きな成果をあげている。先ず先行の業績を分類・整理し、今後の展望を与えた点は、将来の学問発展の上に大きな役割を果すものである。特に白蓮教の成立に関して、従来の諸説を踏まえた上で元末における成立説を強固なものとした点は、本論文の最も重要な点として注目される。さらに明朝支配権力のあり方と白蓮教の地域的分布との相関を究明した点、千年王国論的思考を導入し中国の政治的宗教運動を世界史的視座において理解しようとした点、また秘密宗教から会党へ、会党から革命勢力へという図式を描出した点、など従来みられない新知見を確立した点は、高く評価する所以である。

ただ、白蓮教などの秘密宗教に参加した民衆の姿や彼らの宗教に対する要求などは、必ずしも十分に分析され尽しているとはいえず、さらに一歩進んだ考察が期待される。そのことは白蓮教運動を持続させた核としての民衆の力を究明することになるからである。また、明末華北の社会状況などの考察にもう少し厚みがあれば、徐鴻儒の結社についての議論は一層の説得力をもったであろう。あるいは清代の白蓮教に関する史料を援用することにより、本論文はさらに厚みを増す可能性をもつが、今後の野口氏による研究の充足に期待したい。

総じて本論文は、未来神に希みを托す宗教を撥条とした政治的・社会的異議申し立ての宗教としての白蓮教の歴史を、明代について論究した業績として、今後の学界における重要な位置をしめるものとして評価するものである。